

「そうか」にも強い



カルビーポテトが開発した
ぼろしり（CP07）と津
山課長

ぼろしりは、品質低下を招く「そうか病」にも抵抗性がある。中心空洞が発生しづらい、トヨシロより1割以上多収などの長所もある。加工適性もトヨシロと同等かそれ以上という。

短所として、疫病菌への抵抗性がトヨシロより弱く、成熟がやや遅い「中生（なかい）」で、防除や輪作計画に注意する必要がある。普及見込み面積は少なくとも500ヘクタール以上で、生産者

の評価が高ければさらに増える可能性もある。

同研究所の津山睦生品種開発課長は「トヨシロ、スノーデンの2大品種はシストセンチュウに抵抗性がなく、早急に置き換えなければ。オホーツクではそうか病が多く、期待も大きい」と話している。

◆でんぷん用「北海105号」 北農研芽室拠点

北農研芽室研究拠点（芽室町）では、でんぷん原料用「北海105号」を育成。既存の主力「コナフブキ」に

代わる品種として期待される。

同拠点では、これまでも生食用の「キタアカリ」など、生食、加工を中心にセンチュウ抵抗性品種を作ってきた。北海105号は、ジャガイモのバイオマス燃料の可能性を試験するため育種が始まったが、優れた特性から、でんぷん原料用に転用となった。

重量やでんぷん含有量などを総合すると、コナフブキより1割以上多収。疫病菌に弱く、ごく晩生であることなど、栽培面では注意が必要となる面もある。

1割以上多収に

栽培の中心はオホーツクや十勝の周辺地域で、普及見込み面積は25年に1000ヘクタール。でんぷん原料用は道総研北見農業試験場が開発した品種もあり、道などは22年に、合わせて100%抵抗性品種に置き換えを目標としている。

同拠点の田宮誠司プロジェクトリーダーは、「今後も本来の担当である生食用を中心に、抵抗性品種を出していきたい」と話している。

<ジャガイモシストセンチュウ>

ジャガイモの根に寄生する害虫で、大幅な収量低下をもたらす。薬剤による防除は難しい。卵を包む殻（シスト）を作り、土壤中で10年以上も生存できるため、輪作でも生息数を減少させられない。抵抗性品種はシストから生まれたセンチュウが栄養を吸収できず生き残れないため、密度を低下させることができる。